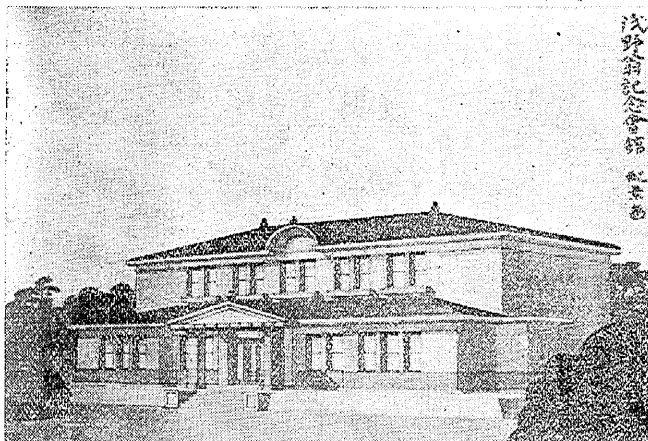




# 紀念館と追悼會

故淺野翁紀念會館建設に關しては、其不足額調達の爲に、前川專務始め會社幹部の斡旋する處少くなかつたが、全従業員のご遺族の純情を諒として、此不況時にも關らず、不足全額を會社より支出する事に決定し、愈十月二十日を以て工事に着手し、遅くも來春三月頃には竣工する豫定の由である而し十一月八日は故翁の一週忌速夜に相當するを以て、菅原所長は全山を代表して本邸に参向し、山元にては午後三時より、集會所に於て、役員役付一同の追悼會を舉行する事になり中央に佛壇をしづらへ、南州氏寄贈の故翁肖像と位牌を安置し、香華燈燭茶菓珍膳を供へ、其傍に翁の銅像を飾り、宮下師導師となりて同向し、役員總代會田院長、従業員總代遠藤清氏の



紀念館竣工豫想圖

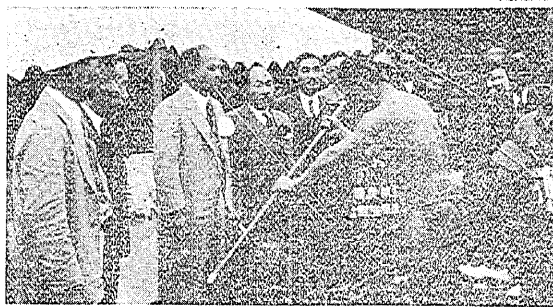
弔辭、南州氏の感話、各代表の焼香参拜演講課長の挨拶等ありて閉會し、引きつゞき六時迄従業員多數の参拜があつた。

## 磐炭見事入選

豫て商工省日本礦山協會で、災害防止の活動映畫脚本を募集中の處、之に應ずるもの千二百に達し、嚴選の結果、我磐城炭礦應募「黎明に暎し」六巻略三千呎物が、他の二編と共に見事入選したる由。作者は勞務課の奇才山田徹郎氏で、當年の大火災を背景とした雄大なスケールに始まり、配役千數百の闘争劇で、映畫界のトップを切る獨逸表現式に學びたるもの、由にて、協會では之を刊行すると同時に、磐城炭礦の映畫化を目論んで居ることの事なれば、さしづめ勞務課長などは高級の一役を演ぜねばなるまいとの噂とらへり。何れにしても磐炭は勿論、我山田氏の名譽といふべく我等は心から敬意と敬意を表する者である。

## 相撲大會

磐炭健康保險組合主催で十月十一日金坂相撲場に於て、相撲大會が開催せられた。内郷高坂の三組に分れて、全山従業員、血を沸し肩を凝しての應援下に龍捲虎撃の活劇を演じ、高坂各十八点内郷九点の成績であつたが、綴は内郷に



演理事長の優勝旗授與

## 我學童優勝

本郡教育會主催第一回郡下三十七校の陸上競技會は、十一月一日磐中校庭で開催せられたが、我高坂高等科生は左の競技に於て優勝した。

## 川ざらひ奉仕

十月四日の公休を利用して社外社内の有志數百人はそれぞれ部署を定めて、宮の川の川ざらひを奉仕し、洪水の防止を圖つた。

## 秋季運動會

第一校は十一日、高坂校及青年團は十五日、第二校及公、学校は十八日、第三

- 本紙贊助金寄贈芳名
- 金五圓 内郷某氏
  - 金壹圓 内郷某氏
  - 金貳圓 大沼長峯丹治氏
  - 金壹圓 本宮小沼佐助
  - 金參圓 内郷小松定次郎

## 教育制度改革概論

矢野 恒太 大内民惠 著  
服部之吉

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同故學に遑あらず。まれば未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威  
京大教授小西重直博士  
書を寄せて曰く、多年ノ御體験ト實地ノ御試驗ニ基ク眞學堂國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議ニ打テ申候云々。

發行所 日本評論社  
東京九ノ内昭和ビル  
取次所 内郷村報社

## 鶴田顧問の講演

エール大學を出でて二十一年は學理に精通し、頭腦明晰あり、晝餐後金坂運動場に於て六年度社宅世話役の紀念撮影を行つて解散した。

## 三大炭礦陸上競技大會

我磐炭斷然優勝す

鷹を供へ、其傍に翁の銅像を飾り、宮下師導師となりて同向し、役員總代會田院長、從業員總代遠藤清氏の

### 矢野 恒太 大内民惠 著 教育部制度改革概論

(四六版二二頁 定價五十錢 郵稅六錢)

行き詰れる現代の教育制度を解體して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の賛同攻撃に違あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

我國教育學界の權威  
京大教授小西重直博士  
書を寄せて曰く、多年御體験と實地ノ御試練ニ基ク眞摯愛國ノ大精神ヲ拜味仕リ不思議ニ打テ申候云々。

發行所 日本評論社  
東京丸の内昭和ビル  
取次所 内郷村報社

帖の寄贈を行ひ、其目的の一端を達したが、更に十一月二日三日の兩夜には、内郷支部主催で、第二第三兩

何れにしても、秋祭は勿論、我山田氏の名譽といふべく我等は心から祝意と敬意を表する者である。

### 秋季運動會

第一校は十一日、高坂校及青年團は十五日、第二校及公立學校は十八日、第三

金三圓 内郷某氏  
金貳圓 大沼長峯丹治氏  
金壹圓 本宮小沼佐助  
金參圓 内郷小松定次郎

## 鶴田顧問の講演

エール大學を出でて二十六年、引きつづき研鑽多年學理に實地に造詣深き鶴田勝三氏は、今春以來磐炭の技術顧問として、全山作業の合理化機械化によつて、其能率増進を計るべく、自ら第一線に立つて、其蘊蓄を傾けて貢獻する處少なからず、現場では、鶴田顧問來るの報傳はるや、役員も從業員も緊張することさへ云



問顧問鶴田の服業作

はれて居るが又一面教育方面にも一隻眼を有し、十月十三日高坂小學校の教員諸氏の爲に、一場の講話を試みられた。其大要を聞くに氏が親しく米國に於て履修した私塾中學の組織、學科の選擇學修試驗の方法、出席の取締方法等、自由に自由ならざる教育の特長等より説き起し、公徳心機械力利用、大量生産等につきは、種々興味深き實例を擧げて説明し、日本人

### 慰問費募集

内郷在郷車入分會では、滿洲派遣兵慰問資金募集の爲め、十月三十日十一月三日の二日間磐城緩兩劇場に於て陸軍映畫會を開催し、合せて三千以上入場者を得て、其目的を達したる由。

### 伊藤南州師

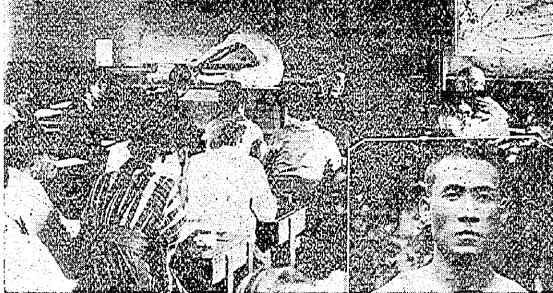
の獨演會は先月は四日、今月は八日に、昭和館に開催したるが、義士傳探偵談は益々佳境に入り、例によつて満員の人氣を博した。然るに師は今月末名古屋乃木會支部に轉任する事になりたるを以て、來る二十二日の講演を以て打切る事になつたので一同別れを惜んで、其再來を祈つて居る。

### 役付聯合會

十一月八日集會所に開催濱崎課長より、十數ヶ條の事項を報告して協議する處

### 草野式強健術

前號既報、新に全身強健術を創案したる草野三千雄氏は、之を一般に普及するに、醫學上よりも研究す



景光演實るけ於會育教郷内と氏野草

の必要ありとし、過般上京して、南胃腸病院副院長桑野佐源太及神座李溪の兩博士を訪問し、其鑑定を乞ひたるに、何れも之を推獎して、其宣傳に應援する事を言明せられたる由。尙氏は赤井岳内郷裁縫校等に於ても、之が實演を試み多數の共鳴者を得たる由。

## 三大炭礦陸上競技大會

### 我磐炭斷然優勝す

地方スポーツ界の一異彩たる、磐城新聞主催第四回入山好間磐城三大炭礦の陸上競技大會は、明治節の午前十時半より、磐中グラウンドに開催せられ。選手の奮闘、應援隊の活躍、觀衆の熱狂は實に凄しきものであつたが、榮冠は終に我磐炭の獲得する事となつた。其得点及選手氏名は左の通りである。

磐炭六九點五	入山四七點五	
好間二五點		
百	瀧口今朝吉	宇野源一郎
二百	瀧口今朝吉	川又多三郎
四百	坂本 誠	大谷 岸雄
八百	寒河江武夫	大谷 岸雄
千五百	高田平八郎	猪狩 廣太
五千	小貫 新一	高橋 武夫
工藤 一郎	佐治 四郎	瀧口今朝吉
砲丸	日塔 新助	瀧口今朝吉
中跳	中井川 明	千葉 美心
高跳	江連 正兒	川又多三郎
三段跳	武内 武士	川又多三郎
二百	中井川 明	川又多三郎
女子	遠藤大内大河原渡邊諸嬢	

### 祝賀會

場に繰込めば、酒肴を處せまきまで並べて之を迎へ、輝く優勝旗植カツプ等の數々は逸早く正面に飾られ、鶴田顧問菅原所長會田院長

瀧崎鏡技部長始め、社内外の後援者、應援團幹部等無慮百余人、徹底的に祝杯を擧げて九時半萬々歳聲裡に閉會したる由。因に五十嵐一也佐藤久太郎等の諸氏發起となり全山有志家より二百余圓を醵金して後援會に寄贈したる由。

淺野翁の一週忌に 民 惠

今村総長を送る

大内民恵

布 昨在留八年間、上司であり、恩師であり、且つは我等夫妻の爲に、結婚式の勞をせられた本派本願寺布哇布総長今村憲猛師は、叙勲の御禮、本山の御用、展墓、布哇日本文庫の設立等の用件を帯びて、今春歸朝せられ、十月二十二日歸任せらるゝ事になつたので、余は何を措いても馳せ参じて、當年の御禮を申し上げ、歸朝以來の久闊を叙し、せめてしばしば、萬障を差繰つて入京、上野に宿をせり、お宿である神田の



今村総長

芳千閣ホテルを訪れたのは十七日の正午頃であつた。師は生憎日光に行かれてお留守であつたが、夕刻電話で、今日は失禮した、明日は君も鎌倉へ行くかい、と、そうか、そんなら明日大に話さう云々、久方振りて師の元氣よき御聲を伺つた時には、ほんとうにうれしかつた。翌十八日は我等同様に關係深き、淺野成蹊學校長、久保田夫人等の肝煎りて、倉にヒクニツクをする事になつて居つたので、午前八時東京驛に到れば、淺野氏久保田夫人をはじめ、高桑元老同き子嬢土田氏夫妻、永岡岩崎兩夫人、川崎女史、沼田橋本石井の諸君、助平水戸の諸親等相前後して来る。

何れも昵懇者や教子等であるので、いや、これははやくで挨拶をすまし、懐舊談に花を咲かせて待つ間もなく、師には令息寛さんを伴ひついで手を握り、十四年振りてすま申上ぐれば、おうそなたかなあ、昔は聊かも變らねぬ温容に接した時には、思はず涙ぐまれた事であつた。かくて九時幾分かて出發、余は特に師に陪席し當年の高恩を感謝し、三十有余年の御苦勞を懐ひ、叙勲の御榮譽を祝し、白人布教にも成功せられた喜び等を申上ぐれば、師もいたく満足に思召され、此度の歸朝を機縁に、布哇第二世や外國人等に、日本の文化を知らしめたいものと、學生の専攻として布哇日本文庫の設立を思召され、其趣旨を發表した處が、宮内省文部省住友岩崎の諸高察、東西圖書出版組合、各博物館等各方面よりの賛同共鳴を得て容易に手に入れる事の出ない、貴重なる文獻や圖書を、約五千部ある様な次第で、豫想外の成功を見たと話され、余は之を畢竟師の徳望と事業との然らしむる處であるなと喜びを申上げて居るうちに、汽車は鎌倉驛についた。見れば布哇中學出身で、米國の大學を出た清水君が、夫人同伴で迎へに出て居られた。夫人は我親友高村君の令嬢で我教子であるので余は思はずおさだかさと呼びかゝれば、一同トットと洪笑したのも一興であつた。それより連れ立つて同君宅で少憩し、自動車三台に分乗し、余は特に一階乗をさせてい

ただき、清水君が案内役、淺野校長が説明役で、鎌倉宮、頼朝公の墓、建長寺、八幡宮長谷觀音等を巡拜し、大佛に到つて、それを背景に、歐米で其技を磨いた橋本君が、紀念攝影に其靈腕を揮ひ、清水君宅に引きかへして、一同持参の書齋をまつた。かはす話はすべからず、布哇の物語りである。談話々布哇で客死した高橋君に及ぶや、思ひは一葉の繪葉書に、寄せ書きとなつて、福井にある未亡人におくられた。かくて一同は電車で江の島に至り、三々五々風光を賞し名残は盡くべくもあらねど、その夕景もなつたので、全員砂原に陣取り、叙勲の御用意した名物何ぞかまんちうによつて解散式はあげられた。モ、ナ、ヒアイカネ、マケメン、カネ、ワネ、二等後家等の布哇特有の語によつて最後の談笑を打ち切り、余は師及寛さん清水君宅にも入り、師は當地の知己訪問に出かけられ、余等兩人は同君夫妻の心をこめたる晩餐の饗應をうけ、布哇日本人年鑑や、夫人の取りいたされたアルバムにより、思ひもかけぬ舊知己の消息を知り、語れど盡きぬ昔語りし時を過ごし、師と三人連れ立つて芳千閣に歸着したのは十一時過ぎであつた。其後三日間師は宮内省、外務省其他を、歸任挨拶に歴訪せられ、二十一日には、妻と娘とが師を送るべく上京したので、之を引見して訪問すれば、三つの時にお別れした娘の成人したるに、いたく驚かされた。余は、妻は娘と共に、自他共に許す荷造りの妙技を揮ひ、余は其晩餐がラヂオで放送される講演の時間ためしを仰せつかり、すべてが終つた處で、師より鄭重なる晩

餐の會食を添うして宿にかへつた翌二十日(はいよく) 出發の當日である。余は早朝師のお召しをうけたので、妻は横濱に直行する事を命じてお宿に参じ、寛さんと共にお手廻り十数個の荷物の目録をつくり合札をつけたりして諸般の準備を了し、三人同乗で東京驛に到り、多数名士に送られて出發し、横濱の船宿松坂屋に到れば、既に高桑氏が先着せられて居つた。師は最後の日本食!鰻丼をそのお望みで我々までもお相伴を承り、いよ

春 洋丸に乗込めば、本山代表何々代表等をはじめ、令弟藤氏内田醫博、桑重画伯、寺田氏、川崎女史等多數参集して来たので、ハイラーの一角に陣取つて、盡きの名残を惜みつゝあるうちに、鳴り渡るドラのひびきに驚かされ堅き握手をかけた下船し、數條のテップによつて、師と相對した時は、たゞ 師よりささきまきませよと神かけてれまざるより外なかりけり

短歌

布哇關係の方々より真心をこめられたる寄せ書きの繪葉書をいたゞき 福井 高橋たき子 嬉しきはた悲しきもなべて皆た、有り難きむれにみなざる 畫 月 東京 遠藤 二耶 すみ渡るみ空の秋のさやけさにひるさへ月のかけを見すらむ 俳句 志賀野壽司 漂ひる案山子もありて出水哉 新葉の干されし問を過りけり 江連 半仙 僧房の夕餉賑はしと、る汁 ささる鉢一座の中へ据はにけり 皆川 二樓 炊煙のまだけきれぬさるる飯 芋汁や三升釜をまん中に 熊田 夢翠 眼白の餌特に買ふ事頼まれぬ 草紅葉して蜻蛉の同じ色 高萩 六王 トロの道其まゝにあり草紅葉 新葉の干しある軒は賑かな 原 たけし モンペはく女も居りて蠅採り 菊人形楠公父子のわかれ哉 目黒 星甫 朝霧の晴れ行く舟をおろしけり 蠅採りかへり切符を持ち居たり 石の色さりく見えて秋の水 新涼やよすがらなる水の音 高木 撫山 垣ぬちや新葉干してある匂ひ 余の如く新葉干してあり 好間 岡部 蛇石 此頃の水美しき蘆草かな 草の實や漆の如き牧の馬 學兒即興 郡山 藤田 貞雄 香を秘むる蜜の菊のこぶし哉 ミルクれる心もさなや夜寒の火子のね顔ながめてあかめこたつ哉

内郷村報の 六大使命

- 一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
二、村内公私各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、總親和總努力の實現を期す。
三、本村共済事業の徹底を期す。

- 四、村内の善事美行を表彰し、且之を奨勵す。
五、本村と本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
六、尙餘力を以て、國民啓蒙に當る。

本紙發行は大内一家の事業に於て、其の社説は子孫に對する遺言を兼ねるものなり。

之を運用するに適任者を得なければ、其成績を擧げ得ない事は云ふ迄もない事である。今我國は明治の兩

昭和五年八月十五日(日五十月八年五和昭) 第三種郵便物認可 第六十號 報村郷内 日十月一十年六和昭 (日五十月八年五和昭) (四) 今村総長を送る 大内民恵 師のお召しをうけたので、妻は横濱に直行する事を命じてお宿に参じ、寛さんと共にお手廻り十数個の荷物の目録をつくり合札をつけたりして諸般の準備を了し、三人同乗で東京驛に到り、多数名士に送られて出發し、横濱の船宿松坂屋に到れば、既に高桑氏が先着せられて居つた。師は最後の日本食!鰻丼をそのお望みで我々までもお相伴を承り、いよ 春 洋丸に乗込めば、本山代表何々代表等をはじめ、令弟藤氏内田醫博、桑重画伯、寺田氏、川崎女史等多數参集して来たので、ハイラーの一角に陣取つて、盡きの名残を惜みつゝあるうちに、鳴り渡るドラのひびきに驚かされ堅き握手をかけた下船し、數條のテップによつて、師と相對した時は、たゞ 師よりささきまきませよと神かけてれまざるより外なかりけり 短歌 布哇關係の方々より真心をこめられたる寄せ書きの繪葉書をいたゞき 福井 高橋たき子 嬉しきはた悲しきもなべて皆た、有り難きむれにみなざる 畫 月 東京 遠藤 二耶 すみ渡るみ空の秋のさやけさにひるさへ月のかけを見すらむ 俳句 志賀野壽司 漂ひる案山子もありて出水哉 新葉の干されし問を過りけり 江連 半仙 僧房の夕餉賑はしと、る汁 ささる鉢一座の中へ据はにけり 皆川 二樓 炊煙のまだけきれぬさるる飯 芋汁や三升釜をまん中に 熊田 夢翠 眼白の餌特に買ふ事頼まれぬ 草紅葉して蜻蛉の同じ色 高萩 六王 トロの道其まゝにあり草紅葉 新葉の干しある軒は賑かな 原 たけし モンペはく女も居りて蠅採り 菊人形楠公父子のわかれ哉 目黒 星甫 朝霧の晴れ行く舟をおろしけり 蠅採りかへり切符を持ち居たり 石の色さりく見えて秋の水 新涼やよすがらなる水の音 高木 撫山 垣ぬちや新葉干してある匂ひ 余の如く新葉干してあり 好間 岡部 蛇石 此頃の水美しき蘆草かな 草の實や漆の如き牧の馬 學兒即興 郡山 藤田 貞雄 香を秘むる蜜の菊のこぶし哉 ミルクれる心もさなや夜寒の火子のね顔ながめてあかめこたつ哉